

アルトゥール・ニキシュ

[ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の卓越した指揮者にして録音のパイオニア]

ヘルゲ・グリューネヴァルト

(前略)

1913年にはある交響曲のはじめての全曲録音が行われた。これこそアルトゥール・ニキシュがベルリン・フィルを率いて録音したベートーヴェンの交響曲第5番である。7年後におなじ楽団を率いて録音したベルリオズの序曲《ローマの謝肉祭》がつづく。さらにロンドン交響楽団とのリストの《ハンガリー狂詩曲第1番》、ウェーバーの《オベロン》序曲と《魔弾の射手》序曲、モーツァルトの《フィガロの結婚》序曲がくる。ニキシュはレコードという媒体に肩入れをし、それが将来いかなる意味を持つかを長い目で察知していたにちがいない。しかし残念ながら録音のために彼に残されていた時間は多くなかった。彼は1922年1月23日、57歳でライプツィヒで世を去った。

オーケストラによる録音は1920年代にはかなりの数に登っていた。指揮者や作曲家たちは早くからこの新しい媒体とその可能性に眼をつけていた。マックス・フォン・シリングスは1921年以降、自分の作品や、ワーグナー、シューベルト、ウェーバーらの音楽を録音し、ハンス・プフィッツナーも自分自身の作品のほかにベートーヴェンやウェーバー、シューマン、メンデルスゾーンを(1923年以降)録音している。フランツ・シュレーカーは(1928年以降)スタジオで自作の音楽、またビゼーやグリーグ、リヒャルト・シュトラウスの作品を録音し、さらにホルネーリウスやウェーバー、グルック、ワーグナーの録音もそれに加わる。当時の多くのすぐれた指揮者や、今日では名前を殆ど忘れられている指揮者もこの楽団を率いてレコードのスタジオ録音を行っている。

レコードは当初はシェラック盤で、直径30センチ、片面の演奏時間は4分しかなかった。録音は蓄音機による再生とは逆の手順で行なわれている。音は録音室に設置されている大きなラッパで収録されて壁を隔てた隣のカッティングルームに送られ、その音圧が(回転する蠟製の)円盤上を外周から内周に向けて移動するカッティング針を振動させ、その針が蠟円盤にスパイラルな音溝を刻んでゆく。スタジオ(それは現在のスタジオというよりは作業場に近い)のラッパの前に演奏者たちが蟬集(いしゅう)し、時には台の上に更に段をつけ、弱い音の楽器を前面に、大きな音の楽器を後方に配置し、低弦楽器の奏者を管楽器の奏者で補う等の工夫を行った。録音のためのこのような作業は、“再生時に音の輪郭がわかれば良い”と言うものではないので、器楽や楽員の編成に手を加える必要があった。このような作業のパイオニアはブルーノ・ザイドラー＝ヴィンクラーであり、彼は指揮者のみならず、放送局のコンサート中継のパイオニアでもあった。

(後略)

参考文献

- (1) ヘルゲ・グリューネヴァルト／マルクス・ツイント：「録音テープを回しながら——ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と音響媒体の関係」、『オーケストラつれづれ。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団125年史』所収、Vol.1、pp. 210-215、ベルリン、(2007)
- (2) ヘルゲ・グリューネヴァルト「音楽と技術、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団史のホットな1章」、マティーアス・ヴィンツェン編集、『音楽！ ある世界的なオーケストラの誕生、19世紀のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団』所収、pp. 81-93、バーデン・バーデン／オーバーハウゼン、(2015)

ヘルゲ・グリューネヴァルト博士略歴

社会学者、音楽出版者、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団広報担当(1989-2006年)、同ドラマトウルク(2006-2016)担当。「ドイツ・レコード批評賞」選考委員、2016年よりドイツ・ヴィルヘルム・フルトヴェングラー協会会頭。

Super Nikisch、KK-Ushi、KSHKO-51、2018.2より